様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６６０
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ１９９７０

研究課題名（和文）ドキュメンタリー写真概念の再検討ー反省的作品と集団的写真実践の分析を通じて

研究課題名（英文）Reconsidering the History of Documentary Photography

研究代表者
田尻　歩（Tajiri, Ayumu）

東京理科大学・教養教育研究院葛飾キャンパス教養部・講師

研究者番号：６０９６６１９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：この科研費プロジェクトでは、既存のドキュメンタリー写真史では中心に扱われてこなかった集団によるドキュメンタリー写真の実践例を考察した。具体的には、ドキュメンタリー写真の形式が大きく変化した1920-30年代と1960-70年代の諸団体に焦点を当てた。こうした写真団体の実践・作品を分析することで、その活動ごとの特殊性と共通性を提示できた。これにより、労働者や女性といった抑圧される人々自身がみずからの表象を作り出す集団的なドキュメンタリー写真の営為の意義を評価することができ、主流のドキュメンタリー写真史のなかではそれほど扱われてこなかった問題系を考察することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ドキュメンタリー写真は災害、戦争、貧困、差別などの問題を扱うことの多い社会的な内容を含むものであり、倫理的問いは避けられない。写真家と苦境にある被写体とのあいだの非対称的な関係については、これまで議論になってきた。その議論のなかで、苦境にある者たち自身が集団で撮影する実践があることを示し、そしてそれがどのような社会的・歴史的条件のもとどのような目的をもって行われてきたかを分析・考察する本研究は、より多角的にドキュメンタリー写真とその意義を考察するためのひとつの視座を与えるものと考える。

研究成果の概要（英文）：The Kakenhi-project reconsiders the history of documentary photography by focusing on the activities of the photographic collectives such as the German and Japanese worker photography movement, the Photo League, the All Japan Students Photo Association, and the Hackney Flashers Collective. Comparing and contrasting these photographic practices, the project presents a more nuanced understanding of documentary photography.

研究分野：カルチュラル・スタディーズ

キーワード：リアリズム　ドキュメンタリー写真　全日本学生写真連盟　ハックニー・フラッシャーズ　プロレタリア写真運動　フォトリーグ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

1980 年代の写真批評・研究においては、伝統的なドキュメンタリー写真の形式がイデオロギー的であると批判された。批判者たちは、(a) よそから来た写真家が被写体をたんに無力で受動的な犠牲者として描いてしまう点、また、(b) 映された社会問題よりも個人としての写真家の勇敢さや人格に注目が向かってしまう点、という二点を主に問題視した。これらの批判は意義深いものだったが、批判が高まる中でドキュメンタリー写真そのものの価値が低く見積もられるようになり、そうした問題系をすでに自覚しながらドキュメンタリー写真実践の刷新を試みていた写真家の反省的な実践が見えづらくなる状況も生まれた。その後、英語圏では 2000 年代からドキュメンタリー写真再評価の動きが生まれ、反省的作品にも焦点が当たり始めたものの、被写体となる人びと自身が集団で撮影者になる集団的なドキュメンタリー写真実践についてはそれほど研究が進んでこなかった。

２．研究の目的

本研究は、被抑圧者集団自身によるドキュメンタリー写真実践に注目することで、既存のドキュメンタリー写真史を見直し、ドキュメンタリー写真の新しい系譜を描き出すことを目的とした。

３．研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究では、これまで周縁化されていた集団的なドキュメンタリー写真実践の活動の歴史を見直すアプローチを取った。その際、下記の三つの写真家集団・写真運動に注目し、その活動や理念、作品を社会背景と絡めて分析を行った。以下、それぞれ記述する。

(1)「全日本学生写真連盟」の活動の分析：　全日本学生写真連盟は、1950 年代から 1970 年代にかけて活発に活動していた日本の学生写真家集団である。研究方法としては、当該団体が 1960 年代～70 年代に発行していた会報を精読し、活動の刷新が試みられた 1960 年代後半から 1970 年代前半にどのような集団的写真実践を目指していたかについての言説を読み解き、整理した。また、この集団の活動の独自性や歴史性を明らかにするため、全国で問題化していた公害問題を扱った写真集『この地上にわれわれの国はない』を、集団の理念や実践の方向性と照らし合わせながら分析した。

(2)「労働者写真運動」の活動の分析：　労働者写真運動は、ヨーロッパを中心に 1920 年代後半から 30 年代前半にかけて興隆した、共産党とつながりのあった文化運動である。手法としては、この写真運動としてはもっとも大規模に展開したドイツの事例を調査し、その実態についての知見を深めた。その後、小規模ではあったが存在した日本の運動（日本では「プロレタリア写真運動」と呼ばれた）についての資料を収集し、ドイツの事例と比較することで、日本の運動の実態解明に努めた。また、合衆国の労働者写真運動、具体的には「労働者映画写真同盟」、そこから分離・独立して形成された「フォトリーグ」について調査し、当時の社会背景とともに活動の実態を調査した。

(3)「ハックニー・フラッシャーズ」の活動の分析：　ハックニー・フラッシャーズは、1970 年代ロンドンで活動していたロンドンの女性フェミニスト写真家集団である。手法としては、当時のイギリスの社会状況とフェミニズム思想に着目しつつ、団体の活動の記録や作品を読み解きながら、社会主義フェミニズムの視点からの集団的写真実践の特徴を探った。また、ロンドン大学バークベック校、ロンドン大学ゴールドスミス校、ビショップスゲート・インスティチュートに所蔵されている団体に関係するアーカイヴを調査し、本研究に役立てた。

４．研究成果

「３．研究方法」で記述した番号と対応する形で、成果を記述する。

(1)全日本学生写真連盟についての研究成果は、「新たなリアリズム写真運動としての全日本学生写真連盟―「集撮」の思想と『この地上にわれわれの国はない』」と題した論文にまとめ、『JunCture―超域的日本文化研究』第 14 号に投稿し、掲載された。本論文では、団体の指導者的存在であった写真批評家・福島辰夫の写真観や社会観を分析した上で、それがどのように 1970 年刊行の全日本学生写真連盟の写真集『この地上にわれわれの国はない』で実現されているかを明らかにした。

(2)労働者写真運動については、「「下からの」集団的ドキュメンタリーの前史―プロレタリア写真運動と伊奈信男の初期写真批評」というタイトルの論文を『東京理科大学教養教育研究院紀要』 創刊号に投稿し、掲載された。この論文では、活動の全体像がこれまで示されてこなかっ

た日本の労働者写真運動である「プロレタリア写真運動」について、当該運動に関わる一次資料を用いて描出した。それとともに、ドイツ労働者写真運動の活動を参照することで、十分な資料が見当たらない状況ではあるものの、ドイツにおける活動と類似した活動が日本でも行われていた可能性を明らかにした。また、アメリカ合衆国の労働者映画写真同盟およびフォトリーグの活動とその意義に関しては 2024 年中に刊行予定の単著『社会実践としての写真』（仮）の一章として発表する予定である。1930 年代後半のフォトリーグの活動では、写真家たちが地域住民と対話し協力しながら社会問題を扱う協働的ドキュメンタリー実践が行われていたため、本章はその活動の内実を分析し提示する。

(3)ハックニー・フラッシャーズの活動については、カルチュラル・スタディーズ学会主催の『カルチュラル・タイフーン 2023』において、「イギリス 1970 年代のコミュニティ写真――社会主義フェミニスト写真家集団ハクニー・フラッシャーズ・コレクティヴについての一考察」と題した発表を行った。彼女たちの実践が登場した 1970 年代半ばから後半までのイギリス社会の状況を踏まえた上で、彼女たちの活動理念と作品を分析し、社会主義フェミニストによる集団的写真実践の特殊性を明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 田尻 歩	４．巻 14
２．論文標題 新たなリアリズム写真運動としての全日本学生写真連盟 ： 「集撮」の思想と『この地上にわれわれの国はない』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 JunCture ： 超域的日本文化研究	６．最初と最後の頁 94～109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/juncture.14.94	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田尻 歩	４．巻 1
２．論文標題 「下からの」集団的ドキュメンタリーの前史ープロレタリア写真運動と伊奈信男の初期写真批評	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東京理科大学教養教育研究院紀要	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 田尻歩
２．発表標題 イギリス1970年代のコミュニティ写真ー社会主義フェミニスト写真家集団ハクニー・フラッシャーズ・コレクティヴについての一考察
３．学会等名 カルチュラル・スタディーズ学会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関